

# 子どもの物語理解における感情理解

—探索的推論の視点から—

教育創発学コース 上原友紀子

Children's understanding the emotional states of characters in narratives:

—A search inference perspective—

Yukiko UEHARA

## SUMMARY

We can construe the emotional states of fictional characters from narrative text. Some research has shown that even young children can perform this operation. However, the cognitive processes by which children and adults come to understand the emotional states of characters have not been compared empirically. This research aimed at examining how children differ from adults in their interpretation of the emotional states of fictitious characters. I focused on "search inference" performed in narrative reading. In this study, two kinds of search inference were defined: situation-based and perspective-based. The results revealed that the difference between a child and an adult in understanding a character's emotional state depends on whether search inference is performed.

## 目次

- 1章 問題
- 2章 読解研究の枠組み—状況モデルの概念—
- 3章 探索的な推論を扱った先行研究の概観
  - A. 状況に基づく探索的な推論
  - B. 人物の視点に基づく探索的な推論
  - C. 先行研究のまとめ
- 4章 探索的推論を規定する認知的能力の仮説モデル
- 5章 まとめ
- 引用文献

## 1章 問題

読解研究においてその研究対象となるテキストは、説明文 (expository text) と物語文 (narrative text) の二つに大別することができる。まず説明文では、テキストの読み取りと理解にはその内容に関する既有知識の質と量とが大きく関わっており、それらの知識が利用される過程が重要となる。一方物語文では、説明文の場合ほど読み手の既有知識を重視する必要がなく、日常生活の中で自然に獲得されていくスキーマや一般的な知識などを利用して、推論など理解に必要な認知的処理を行っていくのである。そのような自然に獲得される知識により理解されるものの中に、登場人物の

感情状態がある。登場人物の心的状態に関する記述は物語文の読解において重要かつ中心的な位置を占めており (子安・西垣, 2006), 物語理解を論じる上で欠かすことのできない重要な研究主題であると言える。

登場人物の感情の理解は推論の一種と見なされており、その成否については1990年代をピークに多くの実験的研究が行われてきた (e.g., Gernsbacher, 1995; Gernsbacher, Goldsmith, & Robertson, 1992; 榎, 1999; de Vega, León, & Díaz, 1996)。それらの研究の結果、所与の状況から単一の感情を導出する処理については、成人の読み手ではかなり正確に行われることが明らかにされている (レビューとして上原, 2006)。しかし、幼児期及び児童期の子どもに関しての、読解における感情理解の研究は充分であるとは言えない。なぜならば、子どもでは読解能力の未発達や表現能力の不足が読解時間や言語回答などの従属変数に影響を与える可能性がある。このことが、子どもの読解研究を阻む大きな要因であると言える。またこのために、成人と子どもが読解において示す感情理解能力の差を検討することも困難になっている。そこで本稿では、先行研究の概観によって感情理解の発達差を規定する認知的能力を探り、仮説モデルの構築及び今後の課題の整理を目指すこととする。

## 2章 読解研究の枠組み—状況モデルの概念—

はじめに、読解研究全般に関する枠組みを確認しておく。読解研究においては、Kintsch (1994) による状況モデル (situation model) の概念が理論的枠組みとして活用されている。状況モデルとは、テキスト内容の表面的な理解表象であるテキストベース (textbase) と区別されるより高次の理解表象であり、文章を読むことで入力された情報を理解するのみでなく、それらを個人の長期貯蔵庫に納められている既有知識と関連づけることにより構成される、より一貫した表象である。状況モデルの構築過程については諸説あり (レビューとして井関, 2004), 未だ統一的なフレームワークは見出されていない。また、状況モデルの構成が物語文と説明文とは異なることも示唆されている (井関・川崎, 2006) など、詳細な部分についてはまだ不透明な部分も多く残っている。しかしその問題点をも越えて、状況モデルの概念は、読解研究に大きな手がかりをもたらした。たとえば、テキストから読み取られる空間的配置・イメージ・具体性・重要度・態度・推論・感情といった諸側面についての研究 (e.g., Glenberg, Meyer, & Lindem, 1987; Haenggi, Kintsch, & Gernsbacher, 1995; Kintsch, 1998; Morrow, Bower, & Greenspan, 1989; Sadoski, Goetz, & Fritz, 1993; Sadoski, Goetz, & Kangizer, 1988; Sadoski, Goetz, & Rodriguez, 2000; Sadoski, & Quast, 1990; Schraw, G., 2000; Schraw, Flowerday, & Reisetter, 1998) への貢献が挙げられよう。

状況モデルを構成する過程において重要なのは、既有知識を活性化 (activate) するプロセスにある。読み手はテキストから得られた情報に関連する既有知識を活性化し、推論などに基づき相互に関連づけてテキストの理解に役立てるのである。前述したように、推理小説などそのジャンル特有の知識の多寡が読解に影響する (e.g., 波多野・小嶋, 1996; 小嶋・波多野, 1996; 大塚, 2001) ものを除き、通常物語文の理解では既有知識を重視する必要はない。これらのことから物語理解は、テキストに関連する知識を様々な角度から広く検索する探索的な処理過程と、その処理に応じてテキストが潜在的に持つ曖昧さを排除し一つの理解を作り上げる収束的な過程とが合わさって構成されているとまとめることができる。ここで言う「探索的」とは、所与の状況に対しある単一の視点からのみの推論ではなく、あり得る複数の推論を導出できるような認知処理を指している。有馬 (1991) はこの過程を医

師の診断に例えて「誤診を少なくするための重要な条件の一つは、最初の段階でできるだけ多数の病因を推論することである」と述べ、「多方向性の推論」と名づけている。また橋本 (1987) は同一状況から多様な感情を推論する能力について検討し、これを「多角的推論」と命名しているが、これも同様の性質を持つ推論であると言えよう。このような探索的な推論は、読解においても、正しい理解に近づくための重要な処理である。ところが橋本 (1987) は、幼児では多角的推論が行われにくいことを指摘しており、このことが子どもの読解力を制限していることも考えられよう。子どもが探索的な推論を行うことに困難を覚える原因を探ることは、子どもの読解を探る基礎的研究であると同時に、教育実践においても有用な示唆を得る手掛りとなると考えられる。

テキストの読解には二つの要素、すなわちテキストそのもの及び読み手が関わっているが、この二者がそれぞれ独立に探索的推論の基点として機能すると仮定すると、探索的推論を検討する先行研究が明確に分類できるように思われる。例えば、テキストそのものを基点とする研究としては、読み手側の要因は考えず、所与の状況に基づいて複数の解釈 (e.g., 結果論的判断／動機論的判断) ができるか探索する推論に関するものが挙げられよう。また、読み手を基点とする研究としては、同一の状況において別の人物を付度した視点から探索的に解釈するものが挙げられる。本稿ではこの基準に鑑み、先行研究を分類・整理することを試みる。

## 3章 探索的な推論を扱った先行研究の概観

本章では、探索的な推論を扱っている先行研究を、状況に基づくものと人物の視点に基づくものに分類し整理する。

### A. 状況に基づく探索的な推論

道徳的判断の研究において、子どもが結果論的判断を成すのか動機論的判断を成すのかという命題は広く検討されてきている (e.g., 竹村・渡辺, 1991)。Thompson (1987) は更に、結果論的判断と動機論的判断の対立が感情理解に影響することについて検討した。彼は Weiner の成功と失敗に関する帰属理論 (1985 など) を応用し、結果は同じだが帰属が異なる3パターンの物語を用意し、帰属が感情理解に与える影響を発達的に検討したのである。Weiner の成功と失敗

に関する帰属理論とは、「感情には結果に依存するもの (outcome-dependent, (causal) attribution-independent affects) と因果関係に依存するもの ((causal) attribution-dependent affects) の二種類がある」とするものである。この実験の結果、適切な帰属から判断をすることが求められる複雑な感情状態の理解は、小学校2年生ではまだ難しく、5年生で成人と同じレベルに達することが見出された。Thompsonの使用した材料文では物語の結果が最終文で述べられており、材料文の構成上認知されやすい結果論的判断からの感情理解を一旦留保しつつ、その他の解釈可能性を求めて動機論的判断からの感情理解を探り出す過程は、探索的な推論の遂行可否の能力が問われる。Thompsonの示した結果は、小学校低学年くらいまでの児童は探索的な推論を行えないことを示しているように見える。

しかしThompson (1987) の研究では最終的な理解に行き着くまでの過程については言及しておらず、低学年児童は初めから結果論的な判断からしか感情理解を行っていないのか、あるいは結果論的・動機論的判断の両方を行った上で取捨選択を行っているのかを判断することができない。この疑問に対して、橋本 (1987) がある知見を提出している。橋本は同一状況から多様な感情を推論する能力を「多角的推論」と名づけた。そこで推論された感情は「感情の選択肢」として用いられるものであり、理解を修正する過程を通して、最終的には一つの感情に答えが収束することを仮定する。橋本は、小学校低学年の子どもは状況に相応しい感情をひとつでも認知するとそこで推論を停止してしまう傾向を見出した。例えば、「今朝学校に行ったら、うさぎが死んでしまっていた」という結果から「かわいそう」という感情を導出した後に、更に「昨日は自分がお世話当番で、様子がおかしいことに気づいていたのに、すまない」という自己内省を前提とする感情を自発的に導出することは、小学校5年生から見られ始めるのである。この橋本の研究をThompson (1987) と対比して考えると、「かわいそう」は結果依存感情であり、「すまない」は因果依存感情と考えることができる。橋本は「子どもは結果依存に行き当たるとそこで推論を停止する」と論じた。橋本及びThompsonの結果をまとめると、結果論的判断からの理解を構成した後新たに動機論的判断から新たな理解を構成するという探索的な処理が行えるようになる移行が5年生くらいで見られる、と解釈できよう。

しかし因果関係から感情を理解する年齢を小学校高学年とする意見については異論もあり、子安・西垣・

服部 (1998) は絵本形式の材料を用いて道徳性及び責任性の判断を検討した実験において、小学校2年生でも理由と結果の両方に言及が見られたとしている。子安らはこのことを「結果のみに注目するただ一つの観点に中心化された判断から、複数の判断を行うようになる児童期の発達過程として重要な意味を持つように思われる」と評価している。これらの研究は結果論的判断のみしかできない段階から動機論的判断も織り込んでいけるようになっていくという点に関しては一致しているものの、その移行が成立する年齢については一致を見ていないのである。

ところでこれらの実験結果に対しては、結果論的／動機論的の二元対立とは別の解釈として、情報の選択基準に帰属することもできると考えられる。この見方を支持する研究として、前述した竹村・渡辺 (1991) は、幼稚園児に対して動機もしくは結果情報のどちらかを欠損させた物語を提示して道徳判断を求めた場合、欠損していない方の情報を用いて道徳性判断をすることを見出した。つまり、結果情報よりも因果情報の方が明示的な状態であれば、幼児でも動機論的判断ができるのである。一意に結果論的判断をしているのではなく、「最もわかり易い手掛りを用いた理解のみ構成し、それ以上の解釈をしようとする努力をしない」という解釈可能性も一考するべきであろう。その解釈に同じく、田中 (1994) は、動機論的道徳判断を成せるようになる年齢が一貫しないのは材料文の不備によるものであると指摘している。彼は物語文法に沿って等質にした材料文を用い、小学校1年生から6年生までの児童に道徳性判断を行わせる実験を行ったところ、主人公の意図を明示的にすることにより、低学年の子どもも高学年の子どもと同様に動機論的判断を行えることを示した。これは子どもが結果論／動機論のどちらかを選択的に利用しているというよりも、最も見え易い手掛りに依存した解釈以外を考えないのだということを示していよう。

つまり幼児期から学童期にかけての年齢の子どもは、正しい手掛りを手にしている場合における判断には誤りがないのだが、判断の基にする情報の抽出が不十分であり、かつその後の探索的な推論を遂行しようとしなことが判断を誤り易くしていると推測される。これまで結果論／動機論の単純な対立として論じられてきた流れに対し別の解釈可能性を示すものとして、補追する実証的研究が待たれるところである。

Thompson (1987) 及び橋本 (1987) らの研究は最終的に感情に関する理解が1つに絞られることを仮定

しており、現実の物語文では所与の状況に対し複数の感情が同時に生起する場合も起こり得ることを考慮すると、これだけでは豊かな理解を成すためには不十分である。「所与の状況に関して複数の感情が同時に生起する」という状態は「入り混じった感情 (mixed feelings, mixed emotions)」と呼ばれており、たとえば「あきら君の飼っていた犬が死んでしまい、あきら君が落ち込んでいるのを見て友だちが新しく別の犬をくれた」という状況において、「犬をもらって嬉しいが、犬を見ると死んだ犬のことを思い出して悲しい」というような状況を指す (例話は久保, 1999より)。入り混じった感情に関する研究はHarter & Buddin (1987) が自閉症児の感情理解についての研究として始めたものであり、Harterらは11-12歳で入り混じった感情の生起し得る状況を産出できたことから、この年齢において入り混じった感情が理解できるとした。一方久保 (1996, 1999) は5歳児でも所与の状況に対して入り混じった感情の説明を与えることが可能であり、11-12歳より前の子どもにとっては産出が困難なだけであるとしている。いずれの仮説に従うとしても、11-12歳では入り混じった感情の理解が可能になっていると考えられるが、それまでの段階においてどのような発達を経てくるのかが不明確である。Harterら (1987) が年少の子どもは「同時に複数の感情が生起することはあり得ない」という信念を持っているのに対し、久保 (1996) は5歳児がそのような信念を有していないことを示した。入り混じった感情の理解は信念などにより制限されているのではなく、何らかの認知的能力の発達に規定されていると考えるべきであろう。

## B. 人物の視点に基づく探索的な推論

小林 (1990) は大学生に一人称または三人称で物語を産出させる課題を課す実験において、一人称の方が登場人物の意思・心情の描写が豊かになることを見出している。小林はこの結果について、書き手が登場人物を同一視することで当事者としての想像が容易になり、心的描写が豊かになるのではと考察している。このことから、読解の際に読み手が登場人物を同一視することは感情理解に影響を与え得ると考えられ、更に、読み手が視点を任意に変更し所与の状況を探索的に見ることができれば、感情理解に影響を与えると予測される。本稿で対象とする幼児期及び学童期の子どもに同じ現象が見られるのかという疑問も含め、以下で検証していく。

視点の取得に関する研究は、いわゆる「三つの山問題」に代表される視覚的イメージ操作を扱う物理的視点取得の研究と、他者からの視点を忖度するという心的視点取得の二者に分類することができる。これらを宮崎 (2008) は「見る視点」と「なる視点」と簡潔かつ平易に表現している。「見る視点」の研究は物理的イメージ操作としての研究 (e.g., 林・竹内, 1994; 大津, 1987) がほとんどを占めており、一方「なる視点」の研究は発達心理学・社会心理学の領域からの研究 (e.g., 橋本, 1987; 橋本・丸野, 1985; 平林・柏木, 1990; 石川・内山, 2001; 谷村, 2005; 戸田, 2003) が多くを占める。

このような分類における「見る視点」を用い、登場人物との同一視という観点から物語の読解について検討しているのが福田 (1996) である。福田は2人の人物が登場する物語において、片方の人物の視界を表す挿絵を用い、登場人物を視覚的に同一視することが感情理解にどのように影響するのかを検討している。その結果、統制群である大学生は視点人物の心的状態にも言及できたのに対し、小学校3年生では視点が置かれている人物 (視点人物) よりも挿絵内に見えている人物 (見え人物) についての感情理解が促進された。これは前述した小林 (1996) の、人物を同一視することによってその人物自身の心的状態の理解がしやすいとする知見及び、中村 (2000, 2001) が高校生を対象とした実践研究において、見えをイメージさせることが心情理解を促進する (見え先行方略) とした知見と矛盾する。この矛盾を説明する一つの解釈として、見え方の違いが考えられる。福田 (1996) では設定された仮想的視界内において、見え人物の表情のみが大写しとなっているのに対し、中村 (2000, 2001) では情景が主となっている。つまり、福田の研究では文脈の他に見え人物の表情が情報として与えられており、児童はより利用し易い情報を採用したために、視点人物よりも見え人物の感情理解が促進されたことが考えられる。今後この課題については、物語の内容や登場人物の関係性、見えの内容といったことが影響している可能性を仮説に盛り込む必要がであろう。

しかし、物語読解における「見る視点」と「なる視点」の分類には曖昧な点もある。福田 (1996) は視覚を媒介することで間接的に役割取得をさせているのだという見方もできる。つまり物語読解における基本は「なる視点」を取ることにあり、「見る視点」を取らせることはその操作的方略であるとするのが妥当であろう。



ないことを、心の理論の測度の不適によるものとする見方(東山, 2007; Wellman & Liu, 2004)も含め、今後の検証が待たれる。

### C. 先行研究のまとめ

以上、探索的な推論を必要とする複雑な感情理解についての先行研究を概観してきた。これらの研究は同じ「推論」という過程を媒介としてまとめられているものの、系統立てて行われているものではない。本稿ではこれらの研究を状況または人物を基点とした探索的な推論であるという観点のもとに整理し、この推論の可否が子どもの豊かな理解を制限している可能性を示した。では、この探索的な推論を支える認知的能力とその発達について、どのようなモデルが考えられるだろうか。次章ではその仮説モデルの構築を試みる。

## 4章 探索的な推論を規定する認知的能力の仮説モデル

従来、物語理解の枠組みとして有効と考えられてきた物語文法は、それ自体は研究上の問題提起として大きな役割を果たしてきたものの、今日では適用できるテキストが限定的であり、物語文全般に適用できる枠組みとして使用するのには困難であるとの指摘がある(西田谷, 2006)。同様に Karniol, & Ben-Moshe' (1991) のプロトタイプモデル (prototype model) も、現実の読解の拡散的側面を説明することが難しい。本稿では、その拡散的側面を「探索的な推論」という概念でまとめることを試みた。

宮崎 (1985) は、読み手が文学作品を読む過程において、仮想世界のある位置に視点を設定したり、作品内のある登場人物に視点を設定し、それによってその登場人物の気持ちを理解しようとしたりするなどの視点活動は、文学作品を深く理解しようとする際の重要な役割を果たしていると論じている。更に、鈴木 (1986) は、視点を媒介とした物語と読み手の関係性を支える能力として、任意に視座を転換し、更にそれに応じた表現 (理解) を成していけることが重要であると示唆している。しかしその一方で、子どもには探索的な推論を行うことが困難であることが示されている。では、探索的な推論はどのような認知的能力に支えられているのだろうか。

探索的な推論には、大まかに分けて三段階の処理を要する。第一には自分が初めに取った視点を意識し、それとは別の視点が存在することを認識することが必要である。第二に、任意に別の視点に移行し、そこから

の再解釈を行うという操作が行えなくてはならない。第三に、それら複数の解釈を同時に保持し、取捨選択あるいは相互の関連づけを行い、理解を洗練していくことができなくてはならない。しかしピアジェ (1954) が指摘したように、子どもは自分の視点からの理解に拘泥し他の視点を全く考慮しない (自己中心性) という認知的特徴を有している。更に子どもはそもそも視点という概念を持っていないという指摘もあり (アスティントン, 1995)、子どもには視点取得の能力が不足していると考えられる。

このことを踏まえ松村 (1990) は、「認知的視点取り」の観点から、子どもの認知的能力の発達を包括的に論じることを試みている。彼の論において重要な位置を占める「二重表象 (dual representation)」の概念は、二つの表象を同時に操作することを指しており、これを可能にする認知規制が幼児期に発達することが重要なのではないかと指摘している。彼は Selman などの先行研究を踏まえ、認知的視点取りの発達過程を仮定した。これによると、4歳くらいから2人の他者について経時的に並列できるようになる。6歳から8歳頃にかけて、他者Aの視点と他者Bの視点を相互に関係づけ、他者Bが他者Aの意図をどう推測するか (相互的視点取り) を理解できるようになる。更に10歳頃から青年期にかけて「<Aの視点を考慮したBの視点>を考慮したAの視点」というようなより高次の<再帰的思考>を理解するようになっていく。つまり、視点の取得に加え、それを多重に表象化して保持・利用する能力があるかどうか、視点取りに基づく諸処理の鍵となるとしているのである。松村は複数の人物間の相互作用を正確に把握するための能力として認知的視点取りを論じているのだが、林 (2002) 及び澤田 (1997) における対立も再帰的思考ではなく二重表象の操作に関する発達差を適用することで、うまく説明できるように思われる。松村 (1990) の提唱した発達段階に則って考えると、澤田 (1997) において4歳後半児に「(読み手=主人公)が副主人公の意図を理解する」ことが可能であったとする結果に矛盾はない。視点を移動できるが他者の視点との関連づけはできないと見られる4歳後半児について、副主人公の意図を単独で理解することは可能と考えられるためである。また林 (2002) において、6~9歳頃に「読み手が、主人公が副主人公の意図を理解したことを理解する」ことが可能であったということも、松村 (1990) の提唱した発達段階と矛盾しない。更に、感情理解と一次的意図の理解の間に相関が見られなかった (東

山, 2002) にも関わらず, 副主人公の感情理解と二次的意図の理解と関連していることが見出された(林, 2002) という結果については, 誤信念の理解が直接感情理解に関連しているのではなく, 二重表象が構成できることが再帰的思考と複雑な感情理解を可能にし, 両者の間にも相関が生まれるのだと解釈する(すなわち, 再帰的思考の可否と感情理解の相関の間に, 隠れた要因として二重表象の構成可否を仮定する)ことで, この問題に解決が見出せよう。また二重表象の概念は, 人物間の相互作用に限ったのみではなく, 探索的な推論全般に関わっていると見ることもできる。一旦構成した理解を留保し他の解釈可能性を探るには複数の表象を平行して保持していく必要があり, 二重表象の理解は不可欠であると考えられるからである。

## 5章 まとめ

物語理解における感情理解, 特に読解領域でのこの研究は近年あまり発表されていない。実験において用いられる材料文に比較して, 実際の物語文は状況が曖昧で複数の解釈が考えられる場合や, 事象を複数の登場人物の視点を通すことで初めて見えてくる感情がある場合, 複数の感情が同時に導出される場合など, より複雑な推論過程を必要とするような非常に豊かなテキストである。このようなテキストの処理に関して, どのような要因がどのような認知的処理に関連しているのかの整理が未だ不十分であるため実験的に統制していくことが難しく, 統合された枠組みの中での議論が行いにくいゆえに, 読解における感情理解の研究は停滞していると考えられる。そのような潮流の中本稿においては, 探索的推論の可否が子どもの感情理解能力を制限するとの仮説に基づき, 幼児期から学童期にかけての発達過程における知見をまとめ直すことを試みた。探索的推論は先行研究の知見を説明することはできたものの, この推論能力が理解に大きく影響しているという仮説を検証するためには, 今後実証的な研究を積み重ねていくことが必要不可欠である。これまで視点取得として説明されてきた認知的処理は, より細分化すると二重表象の構築・保持という認知的能力に支えられていることが示唆されている。これが探索的推論を支えている過程の実証及びモデル化, 更にその発達過程のモデル化が目下の急務であり, 活発な実証的研究が期待される。そのような実証研究を行うことで, 子どもが豊かな理解を得ていく発達過程が明らかになり, ひいては教育実践に資する知見も得られる

であろう。

(指導教官 秋田喜代美教授)

## 引用文献

- 有馬比呂志 1991 因果的推論に及ぼすイメージ喚起性と適合性の効果 広島文教女子大学紀要, 26, 105-111.
- アスティントン, J. W. 松村暢隆(訳) 1995 『子供はどのように心を発見するか—心の理論>の発達心理学』新曜社(ASTINGTON, J. W. (1993). *The child's discovery of the mind*. In Bruner, J., Cole, M., and Karmiloff, S.(Eds.), *The Developing Child Series*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.)
- DE VEGA, M. LEON, I., & DIAZ, J. M. 1996 The representation of changing emotions in reading comprehension. *Cognition & emotion*, 10(3), 303-321.
- 福田由紀 1996 『物語理解における視覚的イメージの視点の役割』風間書房
- GERNSBACHER, M. A. 1995 Activating knowledge of fictional characters' emotional states. In Weaver, C. A. III, Mannes, S., & Fletcher, C. R. (Eds.), *Discourse comprehension: Essays in honor of Walter Kintsch* (pp. 141-155). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- GERNSBACHER M. A., GOLDSMITH, H. H., & ROBERTSON, R. R. W. 1992 Do readers mentally represent characters' emotional states? *Cognition & Emotion*, 6, 89-111.
- GRENBORG, A. M., MEYER, M., & LINDEM, K. 1987 Mental models contribute to foregrounding during text comprehension. *Journal of Memory and Language*, 26, 69-83.
- HAENGGI, D., KINTSCH, W., & GERNSBACHER, M. A. 1995 Spatial situation model and text comprehension. *Discourse Processes*, 19, 173-199.
- HARRIS, P. L. 1992 From Simulation to Folk Psychology; The Case For Development Mind & Language, 7(1&2), 120-144.
- HARTER, S. & BUDDIN, B. J. 1987 Children's understanding of the simultaneously of two emotions: a five-stage developmental acquisition sequence. *Developmental Psychology*, 23(3), 388-399.
- 橋本巖 1987 幼児・児童における感情の多角的推論の発達 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 32(2), 15-30.
- 橋本巖・丸野俊一 1985 他者感情の推論過程の分析—物語における人物の相互作用について— 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 30(1), 111-125.
- 波多野誼余夫・小嶋恵子 1996 談話理解における解釈の構成と変更: 推理小説における推理(2) 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 447.
- 林創 2002 児童期における再帰的な心的状態の理解 教育心理学研究, 50(1), 43-53.
- 林創 2006 二次の心的状態の理解に関する問題とその展望 心理学評論, 49(2), 233-250.
- 林昭志・竹内謙彰 1994 幼児に他者視点取得は可能か?—Broke課題の再検討— 教育心理学研究, 42(2), 129-137.
- 平林秀美・柏木恵子 1990 他者の感情を推論する能力の発達 発達研究, 6, 71-85.

- 井関龍太・川崎恵里子 2006 物語文と説明文の状況モデルはどのように異なるか—5つの状況的次元に基づく比較— 教育心理学研究, 54(4), 464-475.
- 石川隆行・内山伊知郎 2001 5歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について 教育心理学研究, 49(1), 60-68.
- KARNIOL, R., & BEN-MOSHE', R. 1991 Drawing inferences about other's cognitions and affective reactions: A test of two models for representing affects. *Cognition & Emotion*, 5, 241-253.
- KINTSCH, W. 1994 Text comprehension, memory, and learning. *American Psychologist*, 49, 294-303.
- KINTSCH, W. 1998 *Comprehension—A paradigm for cognition*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- 小林夏子 1990 物語産出における人称表現の役割 教育心理学研究, 38(4), 379-388.
- 小嶋恵子・波多野誼余夫 1996 談話理解における解釈の構成と変更: 推理小説における推理(1) 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 446.
- 子安増生・西垣順子 2006 小学生における物語文の読解パターンと「心の理論」の関連性 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, 47-64.
- 子安増生・西垣順子・服部敬子 1998 絵本形式による児童期の「心の理解」の調査 京都大学教育学部紀要, 44, 1-23.
- 久保ゆかり 1996 幼児における入り混じった感情の説明 東洋大学社会学部紀要, 33(3), 5-14.
- 久保ゆかり 1999 児童における入り混じった感情の理解とその発達 東洋大学児童相談研究, 18, 33-43.
- 楨洋一 1999 物語の登場人物の感情状態に関する推論 日本認知科学会第16回大会発表論文集, 1207-1210.
- 松村暢隆 1990 『幼児の知的発達』 関西大学出版
- 宮崎清孝 1985 文学の理解と視点—認知心理学の立場から— 日本語学, 4(12), 41-45.
- 宮崎清孝 2008 視点 宮崎清孝・上野直樹編著『視点 新装版(コレクション認知科学3)』 東京大学出版会, pp. 3-56.
- 溝川藍 2007 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解 発達心理学研究, 18(3), 174-184.
- 森野美央 2005 幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, および仲間との相互作用の関連 発達心理学研究, 16(1), 36-45.
- MORROW, D. G., BOWER, G. H., & GREENSPAN, S. L. 1989 Updating situation models during narrative comprehension. *Journal of Memory and Language*, 24, 292-312.
- 中村順也 2000 「見え先行方略」が文学作品の共感的理解に及ぼす効果: 高校生の感想文の分析を中心として 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 705.
- 中村順也 2001 見え先行ストラテジーが高校生の歌物語読解に及ぼす効果 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 168.
- 西田谷洋 2006 『認知物語論とは何か?』 未発選書第12巻, ひつじ書房
- 野田淳子・久保ゆかり 2008 第3章 幼児期の感情 上淵寿編著『感情と動機づけの発達心理学』 ナカニシヤ出版, pp. 65-84.
- 大津涼 1997 幼児の他者視点取得の過程を追う 日本保育学会大会発表論文抄録, 50, 1002-1003.
- 大塚友紀子 2001 推理小説の読解における推論: 愛読者・非愛読者の比較 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 594.
- PERNER, J., & WIMMER, H. 1985 "John thinks that nary thinks that...": Attribution of second-order beliefs by 5- to 10-years-old children. *Journal of experimental child psychology*, 39, 437-471.
- ピアジェ, J. 大伴茂 (訳) 1954 『児童の自己中心性』 臨床児童心理学第1巻, 同文書院(PIAGET, J. (1948). Le langage et la pensée chez l'enfant.)
- PREMACK, D., & WOODRUF, G. 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Science*, 1(4), 515-526.
- SADOSKI, M., GOETZ, E. T., & FRITZ, J. B. 1993 Impact of concreteness on comprehensibility, interest, and memory for text: implications for dual code theory and text design. *Journal of Educational Psychology*, 85, 291-304.
- SADOSKI, M., GOETZ, E. T., & KANGISER, S. 1988 Imagination in story response: Relationships between imagery, affect, and structural importance. *Reading Research Quarterly*, 23, 326-336.
- SADOSKI, M., GOETZ, E. T., & RODRIGUEZ, M. 2000 Engaging text: effects of comprehensibility, interest, and recall in four text types. *Journal of Educational Psychology*, 92, 85-95.
- SADOSKI, M., & QUAST, Z. 1990 Reader response and long-term recall for journalistic text: The roles of imagery, affect, and importance. *Reading Research Quarterly*, 25, 256-272.
- 澤田忠幸 1997 幼児期における他者の見かけの感情の理解の発達 教育心理学研究, 45(4), 416-425.
- SCHRAW, G. 2000 Reader beliefs and meaning construction in narrative text. *Journal of Educational Psychology*, 92, 96-106.
- SCHRAW, G., FLOWERDAY, T., & REISETTER, M. F. 1998 The role of choice in reader engagement. *Journal of Educational Psychology*, 90, 705-714.
- 園田菜摘 1999 3歳児の欲求, 感情, 信念理解: 個人差の特徴と母子相互作用との関連 発達心理学研究, 10(3), 177-188.
- 鈴木情一 1986 視点研究と読書 読書科学, 30(4), 170-171.
- 竹村和久・渡辺弥生 1991 6歳児の道徳判断における情報探索と因果推論 教育心理学研究, 39(2), 186-194.
- 田中吉資 1994 物語文法の立場から見た道徳的判断の発達の研究 香川大学教育実践研究, 22, 73-84.
- 谷村寛 2005 社会的視点取得の構造的発達 人間関係論集, 22, 121-130.
- THOMPSON, R. A. 1987 Development of children's inferences of the emotions of others. *Developmental Psychology*, 23, 124-131.
- 戸田須恵子 2003 幼児の他者感情理解と向社会的行動との関係について 釧路論集—北海道教育大学釧路校研究紀要—, 35, 95-105.
- 東山薫 2002 誤信念課題は幼児の感情理解能力を予測するか? 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 118.
- 東山薫 2005 “心の理論”の再検討—認知と感情の関連— 聖心女子大学大学院論集, 27(2), 64-50.
- 東山薫 2007 “心の理論”の多面性の発達—Wellman & Liu尺度と誤答の分析— 教育心理学研究, 55(3), 359-369.
- 上原友紀子 2006 「物語理解における情動」研究の概観 東京大学大学院教育学研究科紀要, 46, 239-246.



- WEINER, B. 1985 An attribution theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, 92(4), 548-573.
- WELLMAN, H. M., & LIU, D. 2004 Scaling of Theory-of-Mind Tasks. *Child Development*, 75(2), 523-541.